

資料

我が国における障害者のスポーツについての一考察

山本 佳代子* 稲木 光晴**

〈要 旨〉

障害者のスポーツは、はじめ、損傷部位の機能回復や残存能力の向上を図るためのリハビリテーションとして取り組まれていた。その後、パラリンピックでみられるような競技スポーツとして発展し、多くの人に障害者のスポーツが知られるようになった。

本稿では、競技スポーツ以外の障害者のスポーツがどのようなものか、また我が国の現状、課題について検討する。

キーワード：障害者 パラリンピック 障害者のスポーツ レクリエーション

はじめに

もう一つの (parallel) オリンピック (olympic) と呼ばれるパラリンピックは、競技スポーツを行う障害者にとって、最も大きな国際競技大会として知られている。パラリンピックの歴史は古く、1948年7月28日、ロンドンオリンピック開催日と同じ日に、イギリスのストーク・マンデビル病院で行われた、脊髄損傷の選手によるアーチェリー競技大会が原点である。1972年までは、脊髄損傷者、つまり車椅子競技者だけの大会であったが、現在のパラリンピックは、実施競技も20種目を越え、重度障害者、視覚障害者など様々な身体障害を持つスポーツアスリートたちの祭典となっている。

我が国は、1964年と1998年に二度開催国となる機会があったが、なかでも1998年に長野で開催された冬季パラリンピックには、32ヶ国より1,146選手の参加があり、新聞やテレビで選手の活躍が大きく取り上げられ、関係者以外の国民にも広く障害者のスポーツが知られるようになった。

一部のスポーツエリートが、優れた機能を持つ車椅子や補装具を使い、記録を競う華やかな大会として発展しているパラリンピックであるが、近年「参加すること」よりも「勝つこと」に重点が置かれるようになり、オリンピックと同様、選手のドーピングも大きな問題となっている。「プロ」として生計を立てている選手も出てきており、新聞の社会面で、福祉的な側面か

ら取り上げられていた障害者のスポーツも、徐々にではあるが、「スポーツ競技」として扱われるようになってきた。しかし、実際に障害者が行っているスポーツ活動は、これらの華やかなものだけではない。

そこで本稿では、障害者のスポーツがどのようなものか、そして我が国の現状と課題について検討する。

I. 障害者とスポーツ

1) スポーツの効果

身体障害者のスポーツは、イギリスのストーク・マンデビル病院の Ludwig Guttmann 博士の活躍によって世界に広まっていった。ストーク・マンデビル病院は、第二次世界大戦により多数の脊髄損傷者が発生することを見越し、負傷した兵士の治療と社会復帰を目的に1944年ロンドンの郊外に設置された。この病院の Ludwig Guttmann 博士が、患者の治療・訓練の手段の一つとして積極的にスポーツを治療に取り入れる方法を用いたことが、その後の障害者のスポーツの発展に大きく貢献することになった。

リハビリテーションの中に、スポーツ、レクリエーションを取り入れて行うことは、障害者にとって大きな意義がある。障害者にとってスポーツを行う意義は、心身の健康、体力の維持増進・障害の克服、軽減・精神的ゆとりの獲得・社会参加の促進・周囲への理解、啓発などがあると後藤¹⁾は報告している。

例えば、脳梗塞を患い右半身麻痺の障害が残った人

* 西南女学院大学 保健福祉学部福祉学科 助手

** 西南女学院大学 保健福祉学部福祉学科 教授

が、運動機能回復のために行うトレーニングのひとつに、上肢の関節可動域を広げるトレーニングがある。このトレーニングは通常滑車を使い、それを上下に移動させるという方法で行われる。そこに、「卓球」を取り入れると、単純な反復運動になりがちであったトレーニングが、二人でボールを打ち合うということで楽しく行うことが出来、上肢だけではなく下肢の筋力も強化することができる。さらに技術の向上を目指し、意欲、自発性を持って取り組むようになり、継続して行うことで大会などに出場する機会も増え、病気を患ったことでショックを受け、消極的だった行動に積極性がでてくる。また同じ障害を持つ仲間と出会い、仲間が増えていくことで活動の範囲も広がり、人とのつながりが就職などに結びつく可能性もある。さらに、「卓球」だけではなく、仲間が行っている他のスポーツ、レクリエーションにも興味を持ち、新しくチャレンジすることもあり、通常のトレーニングだけでは期待できなかった、他の身体面での効果も増え、全体的に体力がついてくるようになる。その結果、日常生活においても自立した生活が送れるようになる。

他にも、脊髄損傷者がスポーツを継続して行った場合、身体的な効果としてよく挙げられるのが、排尿排便に関する二次的な疾病予防の効果についてである。

脊髄を損傷し、車椅子で生活している人は、排尿排便を自分でコントロールしなければならず、尿系統の病気にかかる人も多いが、車椅子バスケットボールや陸上競技をすることで、汗をかいたり、腸の動きが活発になり新陳代謝が良くなり、病気を防ぐことができる。このように障害者にとってスポーツ、レクリエーションを取り入れることは、本来のトレーニングの目的を果たすだけでなく、それ以上の効果が期待できる(図1)。

障害者とスポーツ、レクリエーションの関わりは、はじめはリハビリテーションの手段といった考え方があったが、それだけではなく社会復帰後の生活を豊かにするための手段としての、スポーツ、レクリエーションの意義も大きい。

健常者が、余暇に達成感、充実感、満足感、幸福感を得るために余暇活動を楽しむように、障害者も充実した余暇を送れるよう、重度障害者から軽度障害者まで、それぞれの障害に応じ、それぞれの目的にあわせ、様々な工夫がなされた用具や自助具が開発されている。健常者と同じように障害者にとっても、スポーツ、レクリエーションは健康維持のため、楽しみのため、友達作りのため、社会参加のために必要なものである。

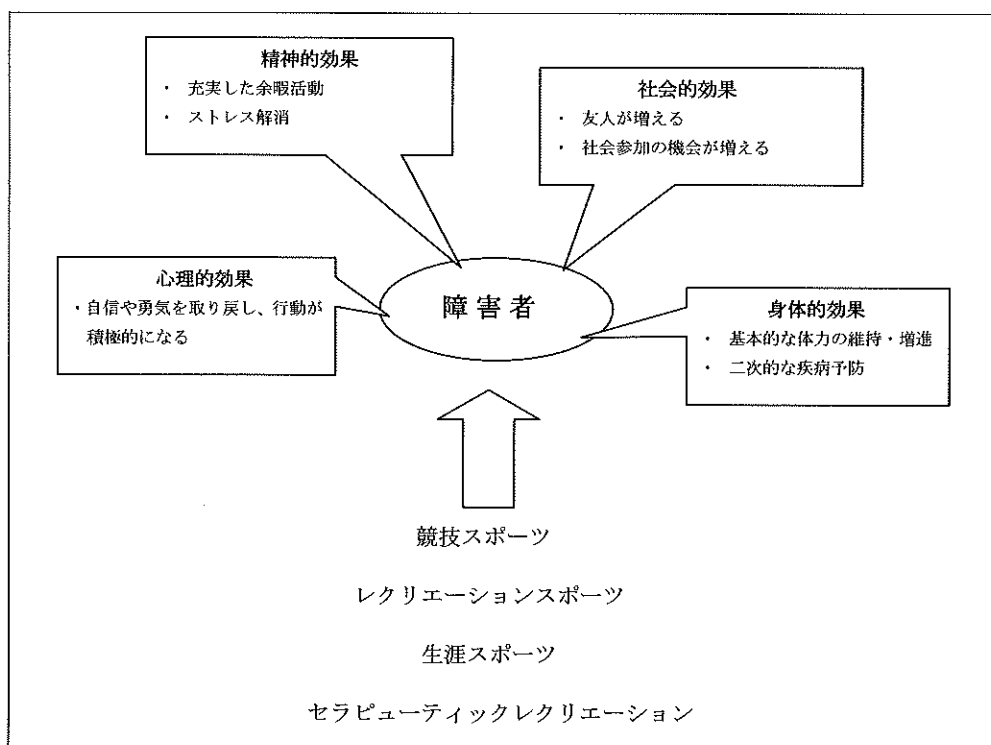


図 1

2) スポーツの種類・特徴

余暇に障害者が行うスポーツやレクリエーションを大別すると、競技スポーツとレクリエーションスポーツ、生涯スポーツに分けられる。それ以外にも、「身体的、精神的、社会的、または情緒的な制約がある人」つまり、レクリエーションへの参加が何らかの原因で、制限される人に対して行われる、セラピューティックレクリエーションがある。

障害者のスポーツの種類は多く、健常者が行うほとんどのスポーツがある。他にも、ボッチャ（重度障害者のスポーツ。目標のボールにどれだけ近づけることが出来るかを競う。）やゴールボール（視覚障害者のスポーツ。聴覚でボールの位置を探り、ゴールされることを防ぐ。）、ツインバスケット（頸椎損傷者のバスケット。高低2つのゴールがある。）のように独自に開発されたものもある。

障害者のスポーツでは、障害を持った人が対等な条件で競技に参加できるようにするために、個人個人の障害の種類、程度の医学的側面や、実施競技に関する運動機能面によって「クラス分け」が医師や理学療法士によって行われる。車椅子バスケットボールなどの団体競技では、障害の状況に応じて選手一人ひとりに「持ち点」が与えられ、チーム全体で決められた点数を超えないようにチーム編成をする必要がある。障害の軽い選手ほど持ち点が高いため、身体機能の良い選手ばかりが揃って出場できるわけではない。またこのようにすることで、障害のない人も車椅子に乗り競技に参加することが可能となる。同じように、視覚障害者のためのスポーツに、晴眼者がアイマスクをつけて参加することも可能となる。

スポーツのルールや用具を個人個人の障害の種類、程度に適合 (adapt) させることで、障害のある、ないに関わらず、誰でもスポーツに参加することができる。そのため障害者のスポーツは adapted sports とも呼ばれている。

II. 我が国における障害者のスポーツの現状と課題

1) スポーツ大会

我が国が、障害者のスポーツに本格的に取り組み始めたのは、1964年東京オリンピック終了後に行われた、東京パラリンピック以降である。パラリンピックの歴史は古く、1948年にイギリスで行われた脊髄損傷者の選手によるアーチェリー競技大会が原点とされているので、欧米よりもかなり遅れていることが分かる。

しかし、東京パラリンピックをきっかけとして、1965年からは、「身体障害者の機能回復と社会の障害についての理解を深めること」を目指し、国民体育大会秋季大会の後に、全国身体障害者スポーツ大会が開催されるようになった。この大会には知的障害者の参加は認められていなかった。1992年より、「知的障害者の自立と社会参加の促進と、社会の障害に対する理解を深めること」を目指し、全国知的障害者スポーツ大会が始まった。さらに2001年からは、「競技を通じて、スポーツの楽しさを体験するとともに、社会の障害に対する理解を深めることによって、障害者の社会参加を推進する」というスローガンのもとに、二つの大会は合併し、全国障害者スポーツ大会と名称を変え開催されている。しかし、一部の内部障害者と精神障害者については、現在も検討中で大会への参加は認められていない。

その他に、日本ろう者スポーツ協会、日本車椅子バスケットボール連盟など、競技別に障害者スポーツ団体があり、全国で大会が開催されている (表1)。

表 1

競技別障害者スポーツ団体
日本ろう者スポーツ協会
日本車椅子バスケットボール連盟
日本身体障害者アーチェリー連盟
特定非営利活動法人 日本盲人マラソン協会
日本身体障害者水泳連盟
日本視覚障害者柔道連盟
社会福祉法人 日本盲人会連合スポーツ連盟協議会 (日盲連全日本グランドソフトボール連盟) (日盲連日本視覚障害者卓球連盟) (日盲連日本フリースローボール連盟)
日本車椅子ツインバスケットボール連盟
日本身体障害者陸上競技連盟
日本障害者バドミントン協会
特定非営利活動法人 ヨットエイドジャパン
日本障害者自転車協会
日本視覚ハンディキャップテニス協会
日本車いすテニス協会
日本障害者ゴルフ協会
日本身体障害者野球連盟
日本ゴールボール協会
日本視覚障害ゴルフアース協会
日本障害者乗馬協会
日本電動車椅子サッカー協会
全国障害者シルクロナイズドスイミング連絡会
日本障害者ダーツ連盟
日本ウィルチェアラグビー連盟
日本シッティングバレーボール協会
日本バリアフリーダイビング協会
日本ボッチャ協会
日本障害者フライングディスク連盟
日本車いすフェンシング協会
日本身体障害者アイススポーツ連盟
日本障害者卓球連盟 (日本肢体不自由者卓球協会) (日本知的障害者卓球連盟)
日本ディスエイブル・パワーリフティング連盟
日本知的障害者スポーツ連盟 (日本知的障害者バスケットボール連盟) (日本知的障害者陸上競技連盟) (日本知的障害者水泳連盟) (日本ハンディキャップサッカー連盟) (日本知的障害者卓球連盟)
特定非営利活動法人 日本車椅子ダンススポーツ連盟
特定非営利活動法人 日本知的障害者スポーツ連盟
日本車椅子空手道連盟
日本脳性麻痺7人制サッカー協会
特定非営利活動法人 スペシャルオリンピック日本
特定非営利活動法人 日本障害者スキー連盟 (日本身体障害者スキー協会) (日本フェアスキー協会) (日本障害者クロスカントリースキー協会)
日本視覚障害者サッカー協会
全日本視覚障害者ボウリング協会

2) 組織

東京パラリンピックの後、1965年に(財)日本身体障害者スポーツ協会(現在、日本障害者スポーツ協会に改称)が設立された。競技会の開催・指導者の養成・研修事業・国際大会への日本代表選手、役員の派遣・障害者のスポーツについての調査研究・広報など我が国の障害者のスポーツにおける中心的な機関である。

また、(財)日本障害者スポーツ協会は、都道府県・政令指定都市の障害者スポーツ協会、競技団体、障害者スポーツ指導者協議会などの関連団体との連絡・調整も行っている。さらに、協会のなかに日本パラリンピック委員会もあり、大会への派遣や選手強化を行っており、競技スポーツの振興も担っている。

3) 指導者・ボランティア養成制度

日本障害者スポーツ協会は、公認障害者スポーツ指導者制度を制定し、指導者の養成・研修事業を行っている。協会主催の講習会の他にも、各地の障害者スポーツ指導者協議会により、全国で地方研修会が実施されている。また、同様の研修が、体育系や福祉系大学で学生を対象に行われている。

指導者の種類は、初級、中級、上級スポーツ指導員さらに特定競技の専門的技術の指導を行うスポーツコーチがある(表2)。圧倒的に初級スポーツ指導員の数が多く、平成17年現在、初級スポーツ指導員21,876名、中級スポーツ指導員1,837名、上級スポーツ指導員475名、スポーツコーチ75名が登録している。

4) スポーツ施設

健常者が利用する市民体育館・市民プールは、福岡市を例にすると、各区に一つ設置されており、地域住民が気軽に利用できる施設となっているが、障害者専用の体育館は非常に少なく、福岡市では一つしかない。1974年に大阪市が、日本で最初の障害者専用の施設である大阪市身体障害者スポーツセンターを開設した。こちらは「A型福祉センター」と呼ばれる施設で、体

育館・温水プール・卓球室・盲卓球室・トレーニング室・アーチェリー場・ボウリング場などがある。その後もA型福祉センターは各地で開設されたが、体育館・温水プール・トレーニング室を備えた、いわゆる総合型の障害者スポーツセンターは、全国でも22ヶ所しかない。他に、「勤労身体障害者体育施設」「勤労身体障害者教養文化体育施設」に分類される施設がある。これらの施設は体育館だけの施設が多く、勤労身体障害者の健康・体力の維持増進と残存能力の向上を目指して作られているが、障害者ではなく地域住民に利用されているだけというところが多い。

5) 課題

課題として、第一に我が国には、障害者が安心してスポーツを楽しむことが出来る場が少ない。病院やリハビリテーションセンター、職業訓練校などの体育施設を利用し、多くの障害者がスポーツに親しんでいるが、それ以外に、安全で、気軽にスポーツを楽しめる場所が少ない。最近、健常者が利用するプールや体育館を、障害者も利用できるように、スロープや障害者用トイレを設置している施設も増えてきたが、水着を着用しなければいけないプールは特に、障害部分を露出することを嫌う障害者も多く、またある程度の技術をもっていないと場になじめないなどの理由もあり、心理的な面からみても障害者にとって利用し易い施設とは言えない。

障害者のスポーツには、健常者のスポーツにはない独自のスポーツも多く、「他の施設では設備が整っていない」、「障害者のスポーツを理解し、適切な介助・指導ができる指導員がいない」などの理由から、障害者スポーツセンターでしか行うことができない種目もある。そのようなスポーツをする際は相手を得ることも重要な問題になる。小学、中学、高校と学校に通っている間は、体育の授業があり、生徒同士または教員と一緒にスポーツに取り組む時間があるが、卒業して社

表2 指導者の種類・役割

種類	役割	登録者
初級スポーツ指導員	●18歳以上で、資格取得後、継続して障害者のスポーツに携わることができる者	21,876名
中級スポーツ指導員	●初級スポーツ指導員として、2年以上の指導経験を有し、都道府県レベルにおいて障害者のスポーツ指導を行う者	1,837名
上級スポーツ指導員	●中級スポーツ指導員として、3年以上の指導経験を有し、障害者のスポーツ指導に必要な専門的技術を身につけ、ブロックレベルにおいて指導者及び障害者のスポーツ指導を行う者	475名
スポーツコーチ	●中級スポーツ指導員又は上級スポーツ指導員として、相当な経験を有し、特定競技の専門的技術の指導と活動組織の育成や指導を行う者	75名

(登録者・・・平成17年3月31日現在)

会人になり、学校から離れると練習相手を見つけることも困難になる。

知的障害を持つ人は、通い慣れた道であれば、道順、交通手段を覚えて単独で行動出来る人もおり、視覚に障害を持つ人も、あまり距離が離れていないようであれば、頭の中に地図を描いて道を覚え、介助者なしで移動することもできる。様々な障害の特徴と、障害者のスポーツの特徴、練習相手の獲得などを考えると、やはり住んでいる地域の近くに総合型の障害者スポーツセンターがあることが望まれる。

第二に指導者やボランティアの問題がある。障害者のスポーツにとって、指導者やボランティアは欠かせない存在である。2002年に日本障害者スポーツ協会が行った障害者スポーツ指導者実態調査²⁾によると、資格を取得した後の活動に対する満足度が全体的に低い。資格取得目的として「障害者スポーツに関心があった」と答える人が最も多いにも関わらず、活動頻度は「1年に数度」が最も多く、全体の約1/3が「まったく活動していない」と答えている。活動の場として多く挙げられたのが、大会等のイベントでの「審判・役員・補助員」「選手・参加者の介助等」である。このような大会の多くは、土曜、日曜に都市部で開催されることが多く、場所や日程の都合が合わない場合は、資格を取得した後もほとんど活動をする場がない。資格を取得しても継続してスポーツ・運動の指導をしている人が少ないという現状も活動の場が少ないことが大きく影響している。活動の場に関する質問では、協力依頼に対して「条件があれば可能」と答える人が多く、日常的に住んでいる地域に活動する場があれば、参加できる人は多いと思われる。また、資質に関する項目では、過半数が指導に不安をもって活動していると答えており、指導者の経験を増やすためにも、養護学校や障害者施設、一般体育館を開放して、地域の施設を利用し、障害者スポーツ指導者の指導のもと、日常的な体操や軽運動、レクリエーションをする場を設けることができれば、指導者の活動の場も確保でき、また障害者にとってもスポーツをする良い機会になる。

そのためには、第三の課題として、健常者、障害者に関わらず多くの人に障害者のスポーツについて、正しく理解してもらう必要がある。障害があるからスポーツができないのではなく、まわりの環境が整っていれば、競技スポーツから重度障害者のスポーツまで、あらゆるスポーツに対応することができる。スポーツというと、運動に馴染みがない者にとっては、運動能力に優れた一部の人が行うものというイメージもあるか

もしれないが、そのような競技としてのスポーツだけでなく、身体にかかる負担が少ない、強度の低い運動、レクリエーションは多くある。福岡市の障害者スポーツセンターの利用状況をみても、年間を通して、水泳の次にレクリエーション活動での利用が多くなっている。

障害者にとって、スポーツが心理的、身体的にどれだけ効果があるか、また障害者のスポーツの魅力を知ってもらい、障害者のスポーツ人口を増やす努力をしていかなければならない。

Ⅲ. 北九州市の状況

北九州市では、1976年に勤労身体障害者体育施設、北九州市障害者スポーツセンターが開設された。屋外プール、体育室、トレーニング室（卓球室）、会議室、医務室、相談室、その他シャワー室などを備えている。プールは、浮力が働くことで、腰や膝など身体に負担をかけずに運動することができ、また水の抵抗をコントロールすることで全身をバランスよく鍛えることができるため、あらゆる障害児者にとって、非常に有効なりハビリテーションの手段となるのだが、北九州市障害者スポーツセンターの場合は、屋外プールであるため、7、8月のわずかな期間しか使用できない。また、障害者専用の施設ではないため、その利用も障害者よりも一般の健常者の方が多い。夏以外はプールが開放されないため、利用者のほとんどが体育館を使用し、スポーツ活動を行っている。主催事業として卓球教室、バレーボール教室、健康体操教室などスポーツ教室が開催されており、車椅子バスケットボールや車椅子テニス、ふうせんバレーボールなどのクラブ活動も活発に行われ、障害者の利用も年々増加しているが、全体的にみると障害者の利用は約40%と少ない。

障害別の体育館利用状況では、肢体不自由が最も多く、次に知的障害、その他の障害、内部障害、言語・聴覚障害、視覚障害の順になっている。筋力維持・向上のために使うトレーニング室も、実際は卓球室として使われており、障害者にとって主に利用できる施設が体育館だけで、指導員の人数も少なく、活動できる種目や障害に限られている。視覚障害者にとって、取り組みやすい盲卓球の設備が整っていないため、その利用が最も少ないと考えられる。

対照的に福岡市には、1984年に全国で4番目となる、障害者を対象とした総合型の施設として福岡市立障害者スポーツセンターが開設された。北九州と福岡で開

館20年に発行された、利用状況などが掲載されている年報を見比べてみると、北九州市の障害者のスポーツ人口が少ないことがわかる。福岡市の1日平均利用者数が約300名に対して、北九州市では一般利用者を含めても約100名しかいない。また、2004年に行われたアテネパラリンピックでは、政令指定都市で選手も役員も派遣されていないのは、北九州市だけである。

一方、活発に行われている種目もあり、ふうせんバレーボールは、「重度障害者も一緒に楽しめるスポーツを」という思いから北九州で生まれ、今年で16回目となる全国大会は、毎年北九州市で開催されている。あらゆる障害者と健常者が一緒に参加できるスポーツとして、大会には全国から約50チームの参加があり、毎年盛大に行われている。また2002年には、4年に一度、予選を勝ち抜いた男子12ヶ国、女子8ヶ国の代表によって争われる世界車椅子バスケットボール選手権大会が、アジアでは初めて北九州市で開催された。北九州市はそれまでも毎年、全国レベルの車椅子バスケットボール大会が開かれており、他のスポーツよりも熱心に取り組まれている。他に、障害者スポーツ指導員講習会を終了したメンバーで構成された、スポーツボランティアの会もあり、障害者のスポーツ活動への支援を行っている。また、放課後や休日の余暇時間を利用し、障害を持つ子どもにスポーツ活動を提供する活動を、理学療法士や福祉施設の職員、障害者スポーツ指導員が中心となりNPO法人を設立して2004年から活動を始めている。スポーツセンターの主催事業の中には、スポーツセンターで開催するのではなく、指導員が地域の体育館に出向いて行う子どもの運動教室もある。今後はこのような活動を増やし、子どもだけではなく、あらゆる障害者に対して、スポーツセンターまで行かなくても、スポーツ活動が出来る場を増やしていくことが望まれる。さらに、従来取り組まれているスポーツのさらなる普及も大切だが、視覚障害や今増加している脳血管障害など、スポーツセンターの利用が少ない障害者に向けて新しく教室を開くなど、一部の障害者だけではなく、全障害者に対して同じ条件で対応できるように、ハード面とソフト面をさらに充実させていくことが望ましい。

IV. 最後に

障害児者にとって、スポーツ・レクリエーション活動が、身体的にも心理的にも非常によい影響を与えるということは、障害者のスポーツに関わっている者に

とって明白であるが、一般的にはまだ十分に浸透しているとは言い難い。今のところ総合型の障害者スポーツセンターも数が少ないため、地域によっては十分にスポーツ活動の場を提供できていないところもある。筆者らは、大学の体育館を利用し、地域の障害児を対象に定期的に運動教室を開催している。活動について保護者に依頼したアンケートでは、「続けて欲しい」「子どもの活動の場が限られているので、このような活動は有意義」「毎回楽しみにしている」「家族や学校以外の人と接する貴重な時間」などの声が聞かれる。障害児はその障害の特徴から、ルールが理解しにくい、同じ動作を続けることが苦手など様々な困難があるが、子どもの頃から、走る・投げるなどの基本的な動きを「あそび」や「ゲーム」のなかで経験することは、体力の向上につながり、また楽しみながら運動経験を持つことで成長してからもスムーズに「スポーツ」へ移行することができる。今後は障害児に限らず、多くの障害者にスポーツ活動を提供していきたいと考えている。

引用文献

- 1) 後藤 邦夫：障害者スポーツの現状と将来への展望。スポーツ教育学研究1992. 特別号, pp.41-48
- 2) (財)日本障害者スポーツ協会 障害者スポーツ指導者の活用を考える研究委員会：2002年度公認障害者スポーツ指導者実態調査結果
- (5) 中村 太郎：パラリンピックへの招待ー挑戦するアスリートたち。岩波書店, 2002
- (6) 中村 太郎：パラリンピックの歴史と課題。バイオメカニクス研究 Vol.4 No.4:254-261
- (7) 飛松 好子：障害者スポーツおよびレクリエーション。リハビリテーション医学35:570-579, 1998
- (8) 重度障害児・者の身体活動をととした社会参加の支援に関する調査研究報告書。財団法人テクノエイド協会, 1999

参考文献

- (1) 矢部 京之助, 草野 勝彦, 中田 英雄：アダプテッド・スポーツの科学～障害者・高齢者のスポーツ実践のための理論～。市村出版, 2004
- (2) 高橋 明：障害者とスポーツ。岩波新書, 2004
- (3) 玉木 正之：スポーツとは何か。講談社現代新書, 1999
- (4) Carol A. Peterson&Scout L. Gunn：障害者・高齢者のレクリエーション活動。学苑社, 1996
- (9) 原田 律子：リハビリを学ぶあなたへ 目の高さで話そう福祉・スポーツ教育論。教育史料出版会, 2002
- (10) 障害者スポーツの歴史と現状。財団法人日本障害者スポーツ協会, 2005
- (11) 北九州市障害者スポーツセンター20年のあゆみ。社会福祉法人北九州市福祉事業団, 1996
- (12) さんさんプラザ20周年記念誌年報。福岡市障害者スポーツセンター, 2003
- (13) 障害者と楽しいスポーツ。日本障害者リハビリテーション協会, 1993

Consideration of Sports For The Disabled In Japan

Kayoko Yamamoto Mitsuharu Inaki

< Abstract >

Sports for the disabled started as a rehabilitation therapy that aimed at the physical function recovery and the improvement of the remaining ability of the patients. Later, sports of this kind developed as games like Paralympic games that people could come to know and learn more about. This author would like to examine in this paper what other kinds of sports would be available to the disabled rather than game sports. The current situation and the issues relating to this topic in Japan will also be discussed in the paper.

Keywords: the disabled, Paralympic Games, The sports for the disabled, recreation